

分離動詞の認定をめぐる諸問題

中 村 直 子

分離動詞は、不定詞では一語書きされる語が、ある条件の下では二つの部分に分かれることができるという、一つの語はその構造的ー貫性を保つという一般的な「語」の概念を裏切る存在である。しかしながら従来の文法記述においては、分離動詞をこの「分離」という現象を特徴とする一つのカテゴリーとして捉えることは希である¹⁾。

まず分離動詞がそう呼ばれる所以たる、分離という現象に注目して、分離動詞の認定基準を定める。すなわち分離動詞の、アクセント、統語的、形態的特徴をまず取り上げる。その際には、最近の文法書における分離動詞についての記述を参照する。少なくともこの条件を満たすものは分離動詞と呼べるという認定基準が、見い出せよう。

1. 分離動詞の認定基準

ここでは、分離動詞がそれと認定されるための条件を、アクセント、統語的、形態的特徴によって定める。

まず、第一構成要素+基礎動詞²⁾という語構造になっていることが挙げられる。分離動詞は複合動詞の一種であるので、たいていの場合、二つの構成要素から成り立っているのである。

1.1. アクセント

次に挙げられる条件は、第一構成要素に強アクセントがあることである。例えばそのことは、分離・非分離動詞を分離するのかどうか見分ける際に明らかになる。すなわち、分離する場合には第一構成要素にアクセントがあり、非分

離の場合は基礎動詞の方にアクセントがある。次の例を比べてみると、より明確だろう。

überlegen : Sie legte sich eine Decke über.

「彼女は毛布を自分に掛けた」

überlegen : Ich überlege, was ich tun soll.

「私はどうすべきか考えている」

同じ綴りの überlegen という動詞でも、第一構成要素にアクセントがある場合は分離し、ない場合は非分離である³⁾。

ちなみにこの場合、第一構成要素に強アクセントがあるということは、第一音節に強アクセントがあるということと同じではない。zusammenführen では、強アクセントは第二音節にアクセントがあるが、これは以下の例が示すように分離動詞である。

Das Schicksal führte die beiden zusammen.

「運命が二人を巡り会わせた」

重要な点は、基礎動詞の方にはなく、第一構成要素の方にアクセントがあるということである。

1.2. 分離という現象：統語的分離と形態的分離

一般に分離動詞が「分離」という場合、そこには二種類の分離の仕方がある。

a) Er kommt morgen in Berlin an.

「彼は明日ベルリンに着く」

b) Er ist gestern in Berlin angekommen.

「彼は昨日ベルリンに着いた」

上記の二つの例文を比較すると、a)では、分離という現象は第一構成要素が基礎動詞から離れて文末に置かれ、枠構造を作るというところに見られる。一方b)では、第一構成要素と基礎動詞の分離は、geという要素によって引き起こされている。別の言い方でいうならば、a)では分離という現象は、枠構造を作るという点で文の構造に関わるものであり、統語的な現象である。一方b)では、分離という現象は語の形態に関わることであり、形態的現象である。すなわち、統語的分離と形態的分離という二種類の分離があるのである。

これらの分離が起こる、あるいは起こらない条件は、次のように場合分けて

きる。

1 統語的分離

1-1 主文において、分離動詞が定形を取る場合、分離動詞による枠構造が作られる（統語的分離が起こる）。

c) Der Zug kommt pünktlich in Hamburg an.

「列車は定刻通りにハンブルクに着く」

d) Kommt der Zug pünktlich in Hamburg an? (疑問文)

「列車は定刻通りにハンブルクに着きますか」

e) Komm pünktlich an! (命令文)

「時間通りに来い」

f) Der Zug kam pünktlich in Hamburg an. (過去形)

「列車は定刻通りにハンブルクに着いた」

1-2 副文において、分離動詞が定形で文末に現れる場合、分離動詞による枠構造は作られない（統語的分離は起こらない）。

g) Ich weiß nicht, ob der Zug pünktlich in Hamburg ankommt.

「列車がハンブルクに定刻通りにつくかどうか私は知らない」

h) Ich möchte den Zug nehmen, der rechtzeitig in Hamburg ankommt.

「私はちょうどよい時間にハンブルクに着く列車に乗りたい」

1-3 分離動詞が zu なしの不定詞で現れる場合、分離動詞による枠構造は作られない（統語的分離は起こらない）。

i) Der Zug soll um diese Zeit in Hamburg ankommen.

「列車は今頃はハンブルクに着いているはずだ」

j) Er sagte mir, daß der Zug pünktlich in Hamburg ankommen wird.

「列車は定刻通りにハンブルクに着くだろうと彼は私に言った」

2 形態的分離

2-1 過去分詞形の場合、ge が第一構成要素と基礎動詞の間に置かれる。

k) Der Zug ist schon in Hamburg angekommen.

「列車はもうハンブルクに着いた」

2-2 zu 不定詞形の場合、zu が第一構成要素と基礎動詞の間に置かれる。

l) Der Zug scheint noch nicht anzukommen.

「列車はまだ着いていないようだ」

さらにここで、一語書きされているかどうかを考慮に入れると、次のような

ことが付け加えられる。

1-4 統語的分離が起こらない場合は、第一構成要素と基礎動詞は一語書きされる。

上記の例では、g, h, i, jがそれに相当する。

2-3 形態的分離の場合には、第一構成要素と基礎動詞の間に置かれるge, zuも共に一語書きされる。

上記の例では、k, lがそれに相当する。

ただし統語的分離が起こる場合には、第一構成要素は必ずしも文末にくる訳ではない。文要素が、第一構成要素と基礎動詞で作られた枠構造の外に置かれる場合もある。つまり、枠外配置である。一般に、als, wieで導かれる文要素、副文、zu不定詞句、文節[Gliedsätze]などが枠外配置される⁴⁾。

Diese rote Rose **blüht** früher **auf** als jene weiße.

「この紅薔薇はあの白薔薇より先に咲く」

Er **sieht** sich den Film **an**, den wir ihm empfohlen haben.

「彼是我々が勧めた映画を見る」

Ich **habe** heute abend **vor**, ins Kino zu gehen.

「私は今晚映画を見に行くつもりだ」

Mir **fällt** doch nicht **ein**, was er zu uns gesagt hat.⁵⁾

「彼が我々になんと言ったのかさっぱり思い出せない」

ここで重要なことは、第一構成要素が文末にくるか否かではなく、基礎動詞と第一構成要素が枠構造を作るという点である。言うまでもなく、枠構造はドイツ語の文構造の大きな特徴であり、この場合、分離という現象がそれに関わっているために「統語的分離」と呼ぶのである。

また、統語的分離が起こる場合には、分離した第一構成要素が小文字書きされるという点にも注意を促しておく。achtgebenのような第一構成要素が名詞の形の動詞において統語的分離が起こる場合にも、achtは小文字で書かれるのである。

Gib acht! 「気をつけろ」

1.3. 分離動詞の認定基準

以上のことから、分離動詞の認定基準は以下のように定められる。

- 1) 第一構成要素＋基礎動詞という語構成を持つ。
- 2) 第一構成要素に強アクセントがある。
- 3) 第一構成要素と基礎動詞が枠構造を作るという統語的分離が起こる。
 - 3 a) 統語的分離が起こらない場合、第一構成要素と基礎動詞は一語書きされる。
 - 3 b) 統語的分離が起こる場合、分離した第一構成要素は小文字書きされる。
- 4) 過去分詞形と zu 不定詞形では、第一構成要素と基礎動詞の間にそれぞれ ge, zu が置かれるという形態的分離が起こる。形態的分離が起こる場合には、第一構成要素と基礎動詞との間に置かれる付加された要素も共に一語書きされる。

この条件をすべて満たす分離動詞としては、次のようなものが挙げられる。

abbrechen 「折り取る」、anfangen 「始める」、aufblicken 「見上げる」、
 ausbreiten 「広げる」、beigeben 「添える」、einkaufen 「買い入れる」、
 mitbringen 「携えてくる」、nachahmen 「模倣する」、
 vorspielen 「(手本として) 演奏してみせる」、zudecken 「覆う」

この中から例として anfangen を取り上げてみる。まず、基礎動詞 fangen に第一構成要素 an が付加された形を取っているので、条件1を満たしている。さらにこの語では an に強アクセントがあるので、条件2も満たしている。

Das Konzert fängt um neun Uhr an. 「コンサートは9時に始まる」

上記の文では統語的分離が起こっており、第一構成要素anと基礎動詞fangenが枠構造を作っている。すなわち条件3bが満たされている。

Was soll ich mit dieser Papier anfangen?

「この紙でどうしろというんだ」

Er wußte nicht, um wieviel Uhr das Konzert anfang.

「彼は何時にコンサートが始まるか知らなかった」

これらは、統語的分離の起こらない例である。一つ目は分離動詞が zu なしの不定詞で現れる場合、二つ目は副文での定形で現れる場合である。すなわちここでは、条件3aが満たされている。

Die Schmerzen haben gestern angefangen. 「昨日から痛みだした」

Ich weiß nichts mit der Zeit anzufangen. 「私は時間を持って余している」

一つ目は過去分詞形での、二つ目は zu 不定詞形での形態的分離が起こっている

る例である。それぞれ *ge*, *zu* が第一構成要素と基礎動詞の間に置かれて全体が一語書きされており、条件4が満たされている。

2. 分離動詞の認定基準を一部しか満たさない動詞

分離動詞の認定基準をすべて満たす動詞が存在する一方で、この条件を一部しか満たさない動詞も存在する。ここではそういう動詞にどのようなものがあるかを挙げる。

2.1. 第一構成要素に強アクセントがあるが、分離しない動詞（グループ1）

まず、「第一構成要素+基礎動詞という語構成」を持っており、「第一構成要素に強アクセントがある」にもかかわらず、分離しないものがある。つまり、条件1, 2しか満たしていないものである。

argwöhnen 「邪推する」, *briefwechseln* 「文通する」,
frühstücken 「朝食を取る」, *liebkosen* 「愛撫する」,
maßregeln 「懲戒処分する」, *radebrechen* 「(外国語を) 片言で話す」,
ratschlagen 「協議する」, *rechtfertigen* 「正当化する」,
willfahren 「意に従う」

これらは二つの構成要素からできていて、複合動詞のように見える。例えば、*briefwechseln* = *brief* + *wechseln* のようにである。しかし次に示すように、アクセントが第一構成要素にあるにもかかわらず分離が起こらないのが、これらの動詞の特徴である。

Er rechtfertigte sein Verhalten. (**fertigte sein Verhalten recht* ではない)

「彼は自分の振る舞いを正当化した」

Der Verbrecher wurde gemäßregelt. (**maßgeregelt* ではない)

「犯人は処罰された」

Ich habe keine Zeit, zu frühstücken. (**frühzustücken* ではない)

「私には朝食をとる時間がない」

上記の例に示されているように、これらの動詞では第一構成要素が基礎動詞と枠構造を作ること（統語的分離）がないし、*ge* や *zu* が第一構成要素と基礎動詞の間に入って共に一語書きされること（形態的分離）もない。

このような動詞が分離動詞とならない理由として、次に示すように、これら

が複合名詞からの派生語であるということが挙げられる。

argwöhnen < Argwohn, frühstücken < Frühstück, maßregeln < Maßregel,
ratschlagen < Ratschlag

これらが名詞からの派生語である根拠は、例えば活用に現れる。つまり、このグループに属する handhaben, radebrechen, ratschlagen のような基礎動詞の部分が強変化動詞のものが、弱変化するのである。

brechen	— brach	— gebrochen
abbrechen	— brach…ab	— abgebrochen
radebrechen	— radebrechte	— geradebrecht
schlagen	— schlug	— geschlagen
vorschlagen	— schlug…vor	— vorgeschlagen
ratschlagen	— ratschlagte	— geratschlagt

以上のように、分離動詞で基礎動詞が強変化動詞のものと比べると、この特徴がはっきりする。分離動詞である abbrechen, vorschlagen は強変化するのに対して、radebrechen, ratschlagen の場合は弱変化である⁶⁾。Fleischer におけるこれらの動詞の語構成の分析は、弱変化になる理由を説明できる。ここには複合名詞からの派生語の例として、bildhauern 「彫刻をする」、katzbuckeln 「追従する」、frühstücken 「朝食を取る」などが挙げられている。いずれも、アクセントが第一構成要素にあるにもかかわらず分離しないものである。これらの語構成は、次のようなものである。

例えば、bildhauern は、SN([SN₁-SV], D)・D(en)型を、katzbuckeln は、SN(SN₁, SN₂)・D(en)型を、frühstücken は、SN(SA, SN₁)・D(en)型を代表する⁷⁾。

つまり、これらの動詞は第一構成要素+基礎動詞という語構成ではなく、名詞+接尾辞(en)という構造を持つのである。すなわち、例えば ratschlagen の schlagen のような一見基礎動詞に見える部分は本来の動詞ではなく、この動詞は ratschlag + en という構造になっているのである。この構造が動詞を弱変化させ、rat を分離させないのである。rat + schlag という結合は、rat + schlagen という結合よりも強いからである。

しかしこのグループには、複合名詞からの派生語ではない liebkosen (< mhd. einem ze liebe kösen), willfahren (< mhd. eines ze willen vāren) も含まれており、さらに、複合名詞に由来する分離動詞 haushalten も存在する以上、

派生語であることが分離しない理由には必ずしもならない。

このような動詞が、第一構成要素+基礎動詞という語構成を持っているように見え、アクセントが第一構成要素にあるにもかかわらず、統語的、形態的特徴が分離動詞とも非分離動詞とも異なっているという点に、独自の名称を付けることで注意が喚起されていることがある。例えば、間接複合語 [mittelbare Komposita]⁸⁾ や、疑似複合語 [Pseudokomposita]⁹⁾ や、「複合動詞の外観を持つ動詞¹⁰⁾」という名称である。分離動詞の認定条件を二つは満たしているが、分離現象を示さないこのグループの名称としては、この中では疑似複合語が一番ふさわしいだろう。

一方、こういう動詞の中には、ge を用いない過去分詞も併用されるものがある。

handhaben — gehandhabt, handhabt

liebkosen — geliebkost, liebkost

willfahren — gewillfahrt, willfahrt

Curme は、willfahren, liebkosen, frohlocken の三つの動詞について二種類の過去分詞が用いられると述べている。なぜならこれらの動詞は、第一構成要素にアクセントがあり、ge のある過去分詞形を持つ単一語とも、第二構成要素にアクセントがあり、ge のない過去分詞形を持つ非分離動詞ともとれるからである¹¹⁾。しかし frohlocken は、今日では非分離動詞と見なされている。つまり、第二構成要素にアクセントがあり、ge のない過去分詞形 (frohlockt) を持つのである。他の handhaben, willfahren は、第一構成要素にアクセントがある場合もあるし、第二構成要素にアクセントがある場合もある。これらは形態的振る舞いとアクセントの点では、非分離動詞とこのグループの間で揺れているのである¹²⁾。

2.2. 分離動詞としては限られた語形しか持たない動詞 (グループ2)

不定詞や過去分詞の形で現れる際にしか、分離動詞としての語形を持たない動詞がある。つまり、「第一構成要素にアクセントがある」という条件と、「形態的分離が起こる」という条件を満たしているが、統語的分離が起こらないものである。しかもこの中には、形態的分離が完全に起こるものと、不完全にしか起こらないものがある。後者は、過去分詞の際にしか形態的分離が起こらないのである。つまりこのグループは、二種類に分類できる。一つは、「第一構

成要素にアクセントがある」と「形態的分離が起こる」の条件を満たしているが、統語的分離が起こらないもの(2a)である。

notlanden – notlandete – notgelandet – notzulanden 「不時着する」

notschlachten – notschlachtete – notgeschlachtet – notzuschlachten
「(病獣などを) 非常畜殺する」

nottaufen – nottaufte – notgetauft – notzutaufen 「応急洗礼を施す」

schutzimpfen – schutzimpfte – schutzgeimpft – schutzzuimpfen
「予防接種する」

これらの動詞は、条件1, 2, 4を満たしている。もう一方は、「第一構成要素にアクセントがある」の条件は満たしているが、「形態的分離が起こる」の方は部分的にしか満たさないもの(2b)である。

bauchreden – bauchgeredet 「腹話術でしゃべる」

blindfliegen – blindgeflogen 「計器飛行する」

kunststopfen – kunstgestopft 「かけはぎする」

nachtwandeln – nachtgewandelt 「夢遊する」

probefahren – probegefahren 「試運転する」

これらは条件1, 2は満たすが、条件4は不完全にしか満たさない。すなわち zu 不定形は用いられないのである¹³⁾。

これらの動詞がこのように不完全な形態的振る舞いをすることについては、複合名詞から派生した動詞が主に属するグループ1の中から、第一構成要素と基礎動詞の結びつきが弱くなって、分離した語形が次第に用いられるようになり、分離動詞に近づくものが出てきたという見方をすることができる¹⁴⁾。それに対して、これらは複合名詞からの派生語ではなく、動詞の過去分詞形に第一構成要素が付け加わったものという見方もある¹⁵⁾。そこから不定詞形が作られ、さらに人称変化形が作られていくわけである。

aus Not gelandet > notgelandet¹⁶⁾, 今日ではすでに notlanden, ich notlande, しかし⁺ genotlandet ではなく notgelandet; zum Schutz impfen > schutzgeimpft さしあたり不定詞と過去分詞形のみで用いられる¹⁷⁾。

グループ2a, 2bが共に過去分詞形を持っていることから考えると、説得力がないわけでもない解釈である。

しかしながら、これらの動詞についての記述が一定していないということは、これらの動詞が揺れながら分離動詞に近づこうとしていることを示して

いるとも考えられる。まだ用法が定まっていなくてよい程の揺れがあるのである。例えば、notlandenは現在の用法では、統語的分離はしないが形態的分離はするという特徴をはっきり示す語形を備えている (notlanden - notlandete - notgelandet - notzulanden¹⁸⁾) が、不定詞と過去分詞しか存在しない動詞とされることもある¹⁹⁾。nottaufenについては、Paulがnotgetauft (Luther), nottauft (Eyring) という二種類の過去分詞を挙げているが²⁰⁾、この動詞も現在の用法では、統語的分離はしないが形態的分離はするものとされている (nottaufen - nottaufte - notgetauft - notzutaufen²¹⁾)。bauchredenは過去分詞形で揺れている。bauchredet / gebauchredet という非分離型とグループ1の型の二種類の過去分詞形の間で揺れているのみならず、「不定詞のみが用いられる: er kann bauchreden. 彼は腹話術ができる」と過去分詞形を欠いていることもある²²⁾。一番揺れの激しいものの例は、nachtwandelnである。不定詞形と過去分詞形しか持たないとされている場合がある一方で²³⁾、統語的分離を行う例が挙げられている場合もある。

Er wandelt nacht, also weck ihn nicht!²⁴⁾

「彼は夢遊しているのだ。だから起こしてはならない」

しかし通常これは、「第一構成要素にアクセントがあるが分離しない動詞」として扱われている。つまり、グループ1に属する動詞である。

ich nachtwandele; ich habe (auch: bin) genachtwandelt; um zu nachtwandeln²⁵⁾

blindfliegen は、一般的には分離動詞として用いられる。

ich fliege blind, flog blind; ich bin blindgeflogen; um blindzufliegen²⁶⁾

グループ2 aにいれられる動詞には、そもそも非分離動詞の第一構成要素とされるmiß²⁷⁾を第一構成要素に持ついくつかの動詞がある。つまり、第一構成要素であるmißに強アクセントがあり、形態的分離を行うものである。

mißbilden - mißbildete - mißgebildet - mißzubilden 「作り損なう」

mißbehagen - mißbehagte - mißbehagt - mißzubehagen

「不快感を与える」

mißgestalten - mißgestaltete - mißgestaltet - mißzugestalten

「作り損なう」

mißverstehen - mißverstand - mißverstanden - mißzuverstehen

「誤解する」

これらの動詞が、第一構成要素にアクセントがあり、形態的分離を示すことから、miß が分離・非分離の第一構成要素と見なされている場合もある²⁸⁾。しかし、統語的分離が起こらないために、かろうじて非分離動詞と見なされているようである²⁹⁾。非分離の第一構成要素は一般に強アクセントを持たないにもかかわらず、第一構成要素に強アクセントがあることに関しては、複合名詞や複合形容詞の影響や、韻律的なものが理由として挙げられている³⁰⁾。この強アクセントが第一構成要素にあることがおそらく、これらの動詞の形態的分離を引き起こす要因となったのだろう。

前述のグループ 2 a と同じく、この miß を第一構成要素に持つ動詞についても、過去分詞形、zu 不定詞形についての記述には、大きな揺れが見られる。例えば mißbachten 「無視する」については、非分離型と分離型の二種類の過去分詞が示されている場合がある (mißbachtet / mißgeachtet, zu mißbachten) 一方で、分離型のみ (mißgeachtet, mißzuachten), 非分離型のみ (mißbachtet, zu mißbachten) の場合もある³¹⁾。他に二種類の過去分詞形、zu 不定詞句形が挙げられているものに mißleiten 「誤った方向に導く」がある (mißleitet, zu mißleiten / mißgeleitet, mißzuleiten)³²⁾。他にも散発的に、mißgedeutet, mißzudeuten (mißdeuten 「曲解する」), mißgeraten (mißbraten 「でき損なう」), mißzutrauen (mißtrauen 「信用しない」) のような例も見られるが³³⁾、いずれも非分離動詞と見なされるのが普通である。このような揺れがある以上、miß が分離・非分離の第一構成要素と見なされるのも驚くべきことではないが、前述のように現在ではこれは非分離の前綴りと見なされている。

特殊な使い方に限られるが、miß を第一構成要素として持つ動詞に統語的分離が起こることがある。それは皮肉や、滑稽さを意図する場合である。

O wie verstehen Sie, mein Vater, mich einmal wieder recht gründlich miß!³⁴⁾

「ああ、お父さんはなんと私のことを分かってらっしゃるんだ。なんとまあ、またしても本当に全く間違ってるが！」

Versteh mich nicht miß!³⁵⁾ 「理解してよね、誤解じゃなくって」

2.3. 不定詞のみが存在する動詞 (グループ 3)

複合動詞としては、不定詞形しか持たない動詞がある。

ehebrechen 「姦通する」, wettlaufen 「競争する」, wettrennen 「(車や馬な

どで) 競争する」

二つの構成要素から成り立っているように見え、アクセントが第一構成要素にある点では、グループ1に属する動詞と同じように思われる。しかしこれらの動詞は、不定詞以外の場合には、名詞と動詞による書き換えが行われる。

wettlaufen

Sie laufen / liefen um die Wett.

Sie sind um die Wett gelaufen.³⁶⁾

ehebrechen

Ich breche / brach die Ehe.

Ich habe die Ehe gebrochen.³⁷⁾

副文においても ehebrechen は書き換えられる。

wenn er die Ehe bricht.

ちなみに、wettliefern 「(手に入れようとして) 争う」は現在ではグループ1に属する動詞である。つまり、書き換えは行われない。

Ich wettlifere; ich habe gewettliefert; um zu wettliefern

以上のことから、これらの動詞はグループ1の動詞とは全く異なって、複合動詞としての形態を持つのは完全に不定詞の場合のみと分かる。したがってこれらの動詞は、「アクセントが第一構成要素にある」と「不定詞の場合一語書きされる」という条件を満たすものということになる。つまり、条件1, 2, 3aを満たしている。

2.4. 分離した第一構成要素が大文字で書かれるもの (グループ4)

「アクセントが第一構成要素にある」、「形態的分離が起こる」、「統語的分離が起こる」という条件を満たすが、統語的分離が起こる際に、分離した第一構成要素が大文字で書かれる動詞がある。つまり、条件1, 2, 3a, 4を満たす動詞である。

radfahren 「自転車で行く」

ich fahre / fuhr Rad; ich bin radgefahren; um radzufahren

maschineschreiben 「タイプライターで書く」

ich schreibe / schrieb Maschine; ich habe Maschine geschrieben;

um maschinezuschreiben

kegelschieben 「ボーリングをする」

ich schiebe/schob Kegel; ich habe Kegel geschoben; um Kegel zu schieben
kegelschieben においては、形態的分離が起こっていない。しかしグループ 3
とは異なり、Kegel に定冠詞が付けられないため、これを名詞と取るべきかど
うかは判断しがたい。

3. 分離動詞と意味的に近い慣用句や動詞

2 で扱った動詞は、分離動詞の認定基準をすべて満たしていないという点で
分離動詞の近くに位置する動詞であった。またそれと並んで、分離動詞の認定
基準のうちのどれを満たしているか、あるいはいないかということでは特徴づ
けられないために、前述したグループの中には入らないが、しかし分離動詞と
意味的に近い関係を持つ慣用句や動詞がある。いわば前述したグループが、ア
クセント、統語的、形態的特徴の観点から分離動詞の近くにある一方で、これ
らは意味的に分離動詞の近くにあるものである。これらが分離動詞の認定基準
で特徴づけることができないのは、認定基準が分離動詞のアクセント、統語的、
形態的特徴に基づいているからである。それゆえこれらは、分離動詞との意味
の関係で特徴づけることしかできない。

3.1 .radfahren — Auto fahren 型

先に挙げたグループ 4 と非常に近い関係にある慣用句がある。

Auto fahren 「自動車で行く」、Klavier spielen 「ピアノを弾く」、

Ski laufen 「スキーをする」、Karten spielen 「トランプ遊びをする」

これらは不定詞が一語で書かれることはないし、形態的分離が起こることとい
うこともない。しかし、グループ 4 において統語的分離が起こるような状態にお
いた場合、グループ 4 と見分けがたい。

Er fährt Rad. 「彼は自転車に乗っていく」

Er fährt Auto. 「彼は自動車に乗っていく」

radfahren は統語的分離が起こる場合には大文字書きされるために、Auto
fahren と同じ外見を取るのである。radfahren と Auto fahren の違いは、形態的
分離が起こるような場合にははっきりする。

Er ist radgefahren. 「彼は自転車に乗っていった」

Er ist Auto gefahren. 「彼は自動車に乗っていった」

しかし kegelschieben と比較した場合、違いは不定詞で一語書きされるところ
にしかない。

Ich habe Kegel geschoben. — Ich möchte lieber kegelschieben.

「私はボーリングをした。私はボーリングの方がしたい」

Ich bin Auto gefahren. — Ich möchte lieber Auto fahren.

「私は自動車で行った。私はむしろ自動車で行きたい」

こういう Auto fahren のようなタイプを、Brinkmann は「説明的結合
[orientierende Verbindung]」と呼んでいる。そして、「こういう名詞の特徴は、
統語の特徴が消えてしまっており、名詞が統語的に中和されていることであ
る³⁸⁾」と、名詞が自立語としての性質を弱めてしまっていることを示している。
つまり、定冠詞が用いられず格が不明である、あるいは前置詞で動詞に対する
意味関係をはっきりさせていないという点を指しているのである。

この場合の名詞の動詞に対する関係は、次に示すように radfahren も Auto
fahren もそもそも違いはない。

radfahren: mit dem Fahrrad fahren

Auto fahren: mit dem Auto fahren

しかし、一方はほとんど分離動詞といえるものなのに対し、もう一方は決して
一語書きされることのない慣用句である。

同じ関係は、さらに次のような場合にも見いだせる³⁹⁾。

Ich habe vor, spazierenzugehen. 「散歩に行くつもりだ」

Ich habe vor, baden zu gehen. 「泳ぎに行くつもりだ」

Sie hat den Fußboden blankgebohnt. 「彼女は床をぴかぴかに磨いた」⁴⁰⁾

Sie hat die Gläser blank geputzt. 「彼女はグラスをぴかぴかに磨いた」

例えば spazierengehen と baden gehen についても、次に示すように第一構成要
素と基礎動詞の意味関係は等しい。

spazierengehen: gehen, um zu spazieren

baden gehen: gehen, um zu baden⁴¹⁾

3.2. zurechtkommen — zugrunde gehen 型

一語書きされる前置詞句と動詞の慣用的表現も分離動詞と近い意味関係を持
っている。前置詞句に由来する唯一の分離する第一構成要素は zurecht である。

この第一構成要素を持つ分離動詞としては *zurechtbringen*, *zurechtfinden*, *zurechtkommen*, *zurechtsetzen* などが挙げられる。これらと意味的に関連している慣用句的用法には、次のようなものがある。

zugrunde gehen 「破滅する」, *zugute kommen* 「役立つ」,
zunichte machen 「打ち砕く」, *zuteil werden* 「与えられる」,
zuleide tun 「損害を与える」, *zutage bringen* 「明るみに出す」,
abhanden kommen 「失われる」, *außerstande sein* 「～できる能力がない」,
instand halten 「良好な状態に保つ」

これらにおいては次の例が示すように、形態的分離が起こるとは言えない。

Das Geld ist allen zugute gekommen. 「お金はどんな役にも立った」

Er bemüht sich, den Wagen instand zu halten.

「彼は車を良い状態にしておこうと骨折っている」

しかしながら、分離動詞において統語的分離が起こる場合には、これらの慣用句は分離動詞と見分けがつかないのである。

Ich kam zum Zug gerade noch zurecht.

「私は列車にやっとのことで間にあった」

Das Schiff ging im Sturm zugrunde. 「船は嵐で沈没した」

これらの慣用句と分離動詞との違いは、不定詞で一語書きされるか分ち書きされるかと、分離動詞で形態的分離が起こるような場合に、第一構成要素と基礎動詞の間に入る要素も共に一語書きされるかどうかというところにしかない⁴²⁾。

動詞と慣用表現を作る一語書きされる前置詞句の中で、*zufrieden* だけは一語書きされたり、分ち書きされたりする。*zufrieden sein*, *zufrieden machen* と並んで、*zufriedengeben*, *zufriedenstellen* という動詞も存在する。これらの一語書き、分ち書きの基準については、以下の例が示すように比喩的な意味で用いられる場合には一語書きされると見なすこともできる⁴³⁾。

Er will sich nicht zufriedengeben. (= *sich nicht begnügen*)

「彼は満足しないだろう」

Du sollst ihn zufriedenlassen. (= *in Ruhe lassen*)

「彼をそっとしておきなさい」

Ich habe ihn zufriedengestellt. (= *befriedigt*)

「私は彼の願いを叶えてやった」

しかしこのような意味的基準は、あまり明確な判断基準とは言えない。

Šeludko は、zugrunde gehen のような一連の慣用的用法を、複合動詞と zum Ausdruck bringen のような比喩的意味を持たない用法の間に位置する独自のものと見ている⁴⁴⁾。

3.3 .sitzenbleiben — sitzen bleiben 型

sitzenbleiben, sitzen bleiben のように、同じ構成要素からなり、一語書きされるかされないかだけの差を持つものがある。

Wenn du nicht fleißiger bist, wirst du sitzenbleiben.

「もっとしっかりやらないと、落第するよ」

Du sollst auf dieser Bank sitzen bleiben.

「君はこのベンチに座ったままでいなければならない」

Du sollst nicht gehenlassen.

「だらしなくしてはいけない」

Du kannst ihn um fünf Uhr gehen lassen.

「君は彼を 5 時には行かせてやれる」

Er wird uns bei diesem Fest freihalten.

「この宴会で彼は我々におごってくれるだろう」

Er wird seine Rede frei halten.

「彼は原稿なしでスピーチをずるだろう」

Wir werden Ihnen die Summe gutschreiben.

「この金額をあなたの口座に入金いたします」

Dieser Schüler kann gut schreiben.

「この生徒は上手に書くことができる」

これらの動詞が一語書きされるか分かち書きされるかの基準について、Duden の正書法では次のような規則が挙げられている。

R205

動詞が第二構成要素となる一つながりの一語が、単に語の並列が表す以上の**新たな概念**を表す場合、規則としては一語で書く。

R206

二つの語がまだ**それぞれ独自の意味**を持っている場合は、分かち書きする⁴⁵⁾。

前述の例文は、この規則に従っている。例えば、

Wenn du nicht fleißiger bist, wirst du sitzenbleiben.

という文においては、sitzenbleibenは“nicht versetzt werden”という比喩的な意味で用いられており、

Du sollst auf dieser Bank sitzen bleiben.

という文における sitzen bleiben の“sich setzen und nicht weggehen”という具体的な意味とは異なっている。他の例文においても、gehenlassen は“nachlässig sein”という意味で、freihalten は“für uns bezahlen”という意味で、gutschreiben は“anrechnen”という意味で用いられており、分かち書きされている場合の具体的な意味とは異なっている。これらの語に対しては、「新たな概念を表す場合は一語書きする」という規則は有効である。

しかしこの規則は、どんな場合にも有効なわけではない。例えば kennenlernen, spaziergehen などの動詞では、特に新しい概念を表すわけではないにもかかわらず、一語書きされている⁴⁶⁾。さらに、前述の baden gehen に話し言葉では「失敗する」という意味があることを考慮に入れると、事情はますます複雑になる。すなわち、特に新しい概念を表すわけではない kennenlernen や spaziergehen が一語書きされる一方で、比喩的な意味でも用いられる baden gehen が分かち書きされているからである。さらに、das Fenster offenlassen — eine Frage offenlassen 「窓を開けたままにする—問題を未解決のままにする」のように、比喩的な意味でも具体的な意味でも一語書きされるものもある。これらの例は、上記の一語書きの基準が絶対的なものではないことを示している。むしろ、一語書きか分かち書きかということは、意味の差異を表す手段にすぎないように思われる。

さらに、一語書きの基準の決めがたさを示すのには、次のような例も挙げられる。leichtfallen は普通一語書きされるが、第一構成要素の形容詞が比較級になる場合には分かち書きされる。

Dies wird ihm leichtfallen. 「このことは彼にとっては易しいことだろう」

Das Englische ist mir leichter gefallen.

「英語は私にとっては、ずっと易しいものだった」

一方、第一構成要素の形容詞が比較級であってもなくても、一語書きされる動詞もある。

den Schülern die Klassiker nahebringen 「生徒たちを古典に親しませる」

das Problem einer Lösung näherbringen 「問題を解決へいっそう近づける」
また、こういう動詞の第一構成要素が程度の副詞でより詳しく規定される場合には、分かち書きされる⁴⁷⁾。

Ihr ist alles überaus leicht gefallen.

「彼女にとっては、すべては極めて易しいことだった」

Er ist ihr zu nahe getreten. 「彼は彼女と親しくなりすぎた」

このような場合には、第一構成要素は自立語と見なされているのである。このように些細な統語的環境の差で、分離動詞は一語書きされなくなるのである。これは、分離動詞の第一構成要素と基礎動詞の結びつきが確固たるものではないことを表していると言えよう⁴⁸⁾。

3.4. 分離・非分離動詞

一語書きするかどうかというところに見られるような意味的区別は、分離・非分離動詞の場合にも見られる。動詞が非分離の場合は比喩の意味、分離の場合には具体的意味という意味的対立が現れるのである⁴⁹⁾。

Die Mutter schneidet den Apfel durch. 「母親は林檎を切る」

Das Schiff durchschneidet die Welle. 「船は波を切って進む」

Er setzt die Leute mit seinem Boot über.

「彼はボートで人々を向こう岸へ渡す」

Ich übersetze den Brief ins Deutsche. 「私は手紙をドイツ語に訳す」

Der Gärtner gräbt den Dung unter. 「庭師は肥やしを施す」

Er untergräbt seine Gesundheit. 「彼は健康を徐々に損なう」

Ich hole mir das Buch selbst wieder. 「私はその本を自分で取り戻す」

Ich wiederhole die ganze Lektion. 「私はその課全部を復習する」

例えば、分離動詞の *durchschneiden* が林檎を「切って分かつ」という具体的に *schneiden* する動作を表すのに対して、非分離動詞の方は比喩的な動作である。つまりこの場合、波が切り分けられることは決してないのである。

一方向のような場合には、別の意味的対立が生じている。

Das Auto fährt den Mann um. 「自動車が男を引き倒す」

Wir umfahren die Stadt. 「我々はその町を迂回する」

Sie stellt oft die Möbel um. 「彼女はよく家具を置き換える」

Polizisten umstellten das Haus. 「警察はその家を包囲した」

つまり、分離動詞の **umfahren**, **umstellen** が対格目的語自体に及ぼす影響を表しているのに対して、非分離動詞の **umfahren**, **umstellen** は対格目的語を取り囲んで過ぎていく（対格目的語自体には影響を与えない）動作を表しているのである⁵⁰⁾。このことは、比喩的—具体的という意味的対立が絶対ではないことを示している。ここでも分離動詞か非分離動詞かということは、意味の区別を表す手段としてのみ機能している。

さらに次のような場合には、分離動詞と非分離動詞を分けている基準はますます明確ではない。

Der Zug fährt bis Berlin durch. 「列車はベルリンまで止まらない」

Der Zug durchfährt die Stadt. 「列車は町を素通りする」

Sie hat sich eine Jacke übergezogen. 「彼女はジャケットを羽織った」

Sie hat die Betten frisch überzogen.

「彼女はベッドを新しいシートで覆った」

ここには統語的環境の違いしかない⁵¹⁾。比喩的—具体的という意味的対立も、また別の意味的対立も見いだせないために、分離動詞と非分離動詞を分けているものは不明である。分離動詞と非分離動詞の間には、意味的区別はあっても、はっきりした境界線が引けるほど意味的対立があるわけではない。むしろ、意味的区別以外にこれらを分ける明確な基準はないのである。

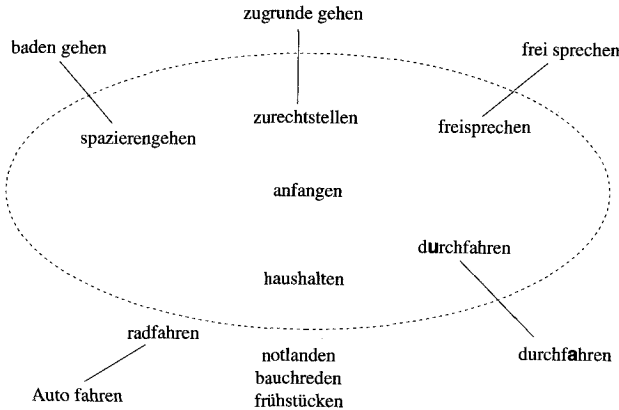
4. 分離動詞とその周辺

まずここで、分離動詞の認定基準を一部しか満たさない動詞について整理しておく。この認定基準をすべて満たすものが分離動詞と認められるのだが、これらの条件を一部しか満たさない動詞は、それに至るまでの中間段階を形成しているのである。以下の表はそれを明らかにする。

条 件	1	2	3a	3b	4
グループ1 : frühstücken	○	○	×	×	×
グループ2a : notlanden	○	○	×	×	○
グループ2b : bauchreden	○	○	×	×	△
グループ3 : wettlaufen	○	○	○	×	×
グループ4 : radfahren	○	○	○	×	○
分 離 動 詞 : anfangen	○	○	○	○	○

グループ1が分離現象を全く示さない語であり、分離動詞が統語的にも形態的にも完全に分離を示す語であることから、グループ2, 3, 4はその間で揺れている語であると言える。分離動詞と分離動詞でない語の間にある中間地帯である。

また、3で述べた分離動詞と意味的に近い慣用句や動詞も含めると、分離動詞とその近くに位置するものは、次のような図で表すことができる。



ここに何らかの中間段階を見いだすことはできないが、分離動詞とその周辺の広がりは見取取ることができる。

4.1. 分離動詞と見なされるようになる可能性

この場合、分離動詞とそうでない語の間に中間段階があるということは、し

かしながら、ここに何らかの順序だった発展段階があるということを表すわけではない。つまり、グループ1から分離動詞に至るまでにグループ2, 3, 4の状態を順次たどって行くということを想定している訳ではない。グループ2よりも3の方が、より分離動詞に近いところまで発達しているなどということとは言えないのである。つまり、ここには分離動詞に向かう一つの方向性というものは存在しない。

では、この中間段階は何を示しているかということ、分離動詞と見なされるようになるかもしれないという可能性である。いずれどの語がどのような経過をたどって、分離動詞になるということを断言することはできない。しかし、グループ4が一番分離動詞と見なされるようになる可能性が高いということは言えるだろう。また、グループ2aの記述の揺れから考えると、グループ2bからグループ2aに入れられるものが出てくる可能性も少なくはないと言えよう。

意味的に分離動詞に近いところに位置するものも考慮に入れると、分離動詞へと発展する何らかの決まった道筋というのではないということ、ますます明らかになってくる。ただ、例えば *zugrunde gehen* - *zurechtstellen* という対で見た場合に、分離動詞と見なされるようになるかもしれないという可能性があると言えるのである。ここで、分離動詞かそうでないかを分けているのは、主に一語書きか分かち書きかということである。

しかしながら、意味論的にはここには一種の道筋が見いだせないこともない。分離動詞ではない語から分離動詞へと発展する一種の方向性を示している例として、ここでは二つ挙げることができる。一つは Afonkin による、*her-*, *hin-* を構成要素として持つ方向副詞が、分離動詞の第一構成要素へと発展する道筋である⁵²⁾。すなわち、方向副詞（第一段階）から、具体的な意味を離れた動詞接頭辞（第二段階）を経て、文法的に最大限にまで抽象化された動作様態的な意味を持つ動詞接頭辞（第三段階）に至るというものである。具体的な動詞の例として、第二段階にあるものに *auf jn. hineinfallen* 「～にだまされる」、第三段階にあるものに *herunterschuffen* 「せっせと働く」が挙げられている。Afonkin の主張では、これらの方向副詞は「分離する接頭辞 *an-*, *auf-* など（さらに以前には非分離の接頭辞 *er-*, *ver-* なども）がたどってきた発達過程を繰り返している⁵³⁾」のである。しかし、これが本当に何らかの「発達過程」であるのかということとは疑わしい。個々の動詞を考える場合には、それらは必ずしも、第一段階から順次段階を上ってきたわけではないだろう。ここでは、

個々の動詞が単にその段階にあるということを示しているといえ、捉えることにしたい。そのように捉えるならば、第一構成要素の意味の抽象度で段階付けができるということは認められる。

もう一つの例は、Šeludko の述べている *zugrunde gehen* のタイプの慣用句である⁵⁴⁾。このタイプは、Šeludko によると *zum Ausdruck bringen* のような慣用句と複合動詞の間に位置するようなタイプである。なぜなら、「イデオムの性質を持つ複合動詞とイデオムの性質を持つ慣用的用法は、ただ構造的形態で分けられるにすぎない。両方の他の特徴は同じなのである⁵⁵⁾」からである。すなわち、*zugrunde gehen* のような慣用句が持つ比喩的意味（イデオムの性質）が、*zum Ausdruck bringen* のような、どちらかといえば構成要素の意味の和としての意味を持つものから区別しているというのである。確かに、ここには「構造的な違い」、つまり一語書きか分かち書きかという差しかないというのはいずれもなすけるだろう。しかしながら、Šeludko はこのイデオムの性質を持つ慣用句がすべて、分離動詞へ発展する中間段階であるとは見ていない。すなわち、*zum Ausdruck bringen* のタイプ → *zugrunde gehen* のタイプ → 分離動詞という一定の発達方向があるわけではないのである。ここで示されている可能性は三つある。すなわち、*zurecht-* のような分離する第一構成要素になるか、*beiseite* のように完全に具体的な意味を保ち、分かち書きされるものになるか、*zufrieden* のように一語書きされたり、分かち書きされたりするようになるかである⁵⁶⁾。つまり、前置詞句の部分の意味の抽象度によって段階があるのである。Afonkin と同じく、意味の抽象度によって段階付けがなされている訳だが、ここではその段階は一応、それぞれ移行の段階ではないものとして捉えられている⁵⁷⁾。

結局ここで明らかになることは、意味の抽象度が高いほど、分離動詞に近い位置を占めるということである。分離動詞と見なされるということは、すなわち一語書きされるということである。しかし、この一語書きの意味的な基準は、3 で述べたように、必ずしも統一されているとはいえない。したがって、次に正書法の問題を考えざるを得ない。

4.2. 正書法の問題

分離動詞ではないものが分離動詞と見なされるようになるために必要なのは、正書法による認知である。それは一語書き、分かち書きについてのみ言えるこ

とではない。アクセント、形態的、統語的特徴についてもそうである。例えば、radfahren において「Ich fahre Rad. と書くのが正しい」と定めているのも正書法だからである。

しかしながら、正書法は絶対的な基準ではない。なぜなら、正書法は言語の標準的な使用法を定めているものであり、それゆえ、その言語を使用している者の標準的な用法が反映されていなければならないからである。正書法で正しい用法とされているもの以外の用法を用いている者もいるはずである。radfahren - Auto fahren の場合に radfahren だけが一語書きされるのは、そもそも Rad fahren と分かち書きされていたものが、頻繁に使われているうちに用法の揺れを生じ、たまたま一語書きが固定してしまったとも考えられる。今の時点では正書法によると誤っているとされる用法も、それがその言語の使用者の中で一般的になれば、正しいと認められるようになる。つまり、正書法を定めているのは、あらかじめ言語体系の中に存在しているものではない。正書法は規則を定めているのだが、その一方で、言語の使用者による使用法に影響を受けざるを得ないのである。

それゆえ、実状に合わないと判断した場合、正書法の改訂を提案することもできる。例えば Fleischer / Barz では、radfahren - Auto fahren の事例については正書法の統一が望ましいと述べている⁵⁸⁾。さらに、3で述べたような一語書きと分かち書きの意味的基準をめぐる混乱に関しても、基準の定め方の曖昧さが原因として指摘されている⁵⁹⁾。

4.3. 開かれたカテゴリーとしての分離動詞

確かに、3で挙げたような様々な揺れを、正書法の基準の曖昧さとして捉えることもできる。しかし、基準を統一することができないのは、明確な、すべての場合に適用することのできる基準というものが存在しないからである。あまりに細分化され、ほとんど個々の事例にそれぞれ規則があるとしか言えないような状況から、それは明らかである。そこではっきりしているのは、一語書きか分かち書きかという基準、あるいは分離するかしないかという基準の決めがたさということである。基準は必ずしも確定してしまったものではない。いつでも変更可能なものである。一方、2で挙げた動詞のタイプから明らかになるのは、アクセント、統語的、形態的特徴で分離動詞を認定しようとする場合に、条件をすべて満たすものを分離動詞と見なすことはできるが、分離動詞と

そうでない語の間に越えがたいほどの隔たりがあるという訳ではないということである。

すなわち、分離動詞とそうでない語（あるいは慣用句）の間に境界線を引くことは不可能ではないが、その境界線は厳しく他を排斥するようなものではないのだ。確かに、1で挙げた分離動詞の認定基準は、アクセント、統語的、形態的特徴において分離動詞を捉える場合は有効である。すなわちこの範囲内では、分離動詞の境界線はこの認定基準であると言ってもよかろう。明らかに、この基準をすべて満たすものは分離動詞であると言うことができる。しかしながら、少し視点を転じてみると、その基準を一部だけ満たす動詞という中間段階が存在している。そこには、今は分離動詞の領域の外にあるものが取り込まれる可能性が見て取れる。さらに、意味的に非常に近いところにあり、ほとんど一語書きするか、分かち書きするかという差しか見いだせないような動詞、慣用句も存在している。ここにおける分離動詞の境界線は、統一した基準がないという点で、あまり明確なものではなく、これらが分離動詞になる可能性も、決して否定できるものではない。このように自らのうちに新しい語を取り込めるといふ点、すなわち閉鎖的でないといふ点で、分離動詞は開かれたカテゴリーであると言うことができる。

確かに、ある語が分離動詞と見なされるかどうかということにとって、正書法の存在は大きい。しかし、正書法がある程度恣意的に定められる規則であるとは言え、実際の用法を全く無視できない以上、恣意的と言えども限りがある。そのために、基準が細分化され、統一したものではなくなるのである。これまで述べてきた揺れを考える場合、厳密に言えば、使用者による用法の違いという揺れと、正書法が統一した基準を定められないという、基準の適用という点から見た揺れの二種類があるわけだが、この揺れそのものが、分離動詞の領域の境界線を明確に引けない原因と言ってもよいだろう。いわゆる「正書法の基準の曖昧さ」と呼ばれるものも、分離動詞となる可能性があると思えることができる。

先に挙げた図は、このような意味での分離動詞の周辺⁶⁰⁾を示しているのである。すなわち、分離動詞の周辺部分は、分離動詞のカテゴリーの中に取り込まれる可能性のある部分である。これらの周辺は、統語的、形態的レベルと、意味的レベルの両方に広がっているのである。

註

- 1) 最近の文法書において、分離動詞がどのように扱われているかについては、以下を参照。

中村直子：「分離動詞をめぐって」 京都ドイツ語学研究会会報第8号 1994

- 2) 以下では、複合動詞の構成要素について、第一構成要素、基礎動詞という名称を用いる。例えば überlegen においては、über が第一構成要素であり、legen が基礎動詞である。

- 3) 第一構成要素にアクセントがあるかないかが、分離するかしないかに一致しているという点では、どの文法書も意見は一致している。

s. Blatz S. 771; Paul Bd. 5 S. 33; Duden S. 412; Engel S. 439; Schulz / Griesbach S. 38; Helbig / Buscha S. 188

BLATZ, Friedrich: Neuhochdeutsche Grammatik 2Bde. J. Lang's Verlagbuchhandlung und Buchdruckerei. Karlsruhe. 1895³

PAUL, Hermann: Deutsche Grammatik 5Bde. Verlag von Max Niemeyer, Halle, 1916-1920

DUDEN: Grammatik der Gegenwartssprache. Der Duden in 10 Bänden Bd. 4, 1984⁴

ENGEL, Ulrich: Deutsche Grammatik, Julius Groos Verlag, Heidelberg, 1988

GRIESBACH, Heinz · SCHULZ, Dora: Grammatik der deutschen Sprache, Max Hueber Verlag, 1962

(邦訳：稲木勝彦他訳「ドイツ文法」三修社)

HELBIG, Gerhard · BUSCHA, Joachim: Deutsche Grammatik, VEB Verlag Enzyklopädie, Leipzig, 1981⁷(1972⁴)

(邦訳：在間進訳「現代ドイツ文法」三修社)

- 4) vgl. Schulz / Griesbach S. 301f.; Helbig / Buscha S. 501f.

- 5) Rath の分離動詞の枠外配置についての論文では、分離動詞による枠構造における枠外配置のタイプは、「はみでた文要素によるもの」、「関係文によるもの」、「接続詞に導かれた文によるもの」、「分類要素、比較文によるもの (als に導かれる要素)」、「文節によるもの」、「付け足しのためのもの」、「強調のためのもの」に分けられている。ちなみにこの中で一番数が多いのは、副文によるものである。

RATH, Rainer: Trennbare Verben und Ausklammerung. Zur Syntax der deutschen Sprache der Gegenwart. In: Wirkendes Wort 15 1965

- 6) s. Blatz S. 774; Schulz / Griesbach S. 41; Fleischer S. 315

FLEISCHER, Wolfgang: Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache, Max Niemeyer Verlag, München, 1975⁴

- 7) Fleischer S. 315 SN は名詞語幹, SV は動詞語幹, SA は形容詞語幹, D は派生接

尾辞を示す。

- 8) Blatz S. 774; Curme S. 329

CURME, George: A grammar of the German language, Frederick Ungar publishing
co. New York, 1922²

- 9) Duden S. 412 ただし、Duden の疑似複合語は後述するグループ 2 も含まれている。
Fleischer でもこの名称は用いられているが、グループ 2 のみを指している。
s. Fleischer S. 316

- 10) Schulz / Griesbach S. 40

- 11) ただし、ge のついた過去分詞の方が好まれると述べている。vgl. Curme S. 257

- 12) ただし liebkosen については Paul が、

この語はすでに中高ドイツ語でもそうだったように、今日では非分離で用いら
れている。しかしそれと並んで、19世紀までは不定詞と過去分詞での分離形が
見られた。

liebzukosen, liebgekost (Bd. 5 S. 41)

と述べている。さらに handhaben についても、handhaben, handgehabt という形が
見られたと述べている (Bd. 5 S. 42)。この場合、この動詞は分離動詞とこのグル
ープの間を揺れていたのである。

ちなみに、liebkosen のアクセントは今日もなお定まっていない。Duden 1 では
第二構成要素にアクセントがあり、二種類の過去分詞を持つとされているが、
Duden 9 では、アクセントは第一構成要素と第二構成要素のどちらにあってもよく、
アクセントが第一構成要素にある場合には ge のある過去分詞形、アクセントが第
二構成要素にあるばあいには非分離動詞型の過去分詞を用いるとされている。

s. Duden 1; Duden 9 S. 451

(Duden 1): Rechtschreibung der deutschen Sprache und der Fremdwörter. Der
Duden in 10 Bänden Bd. 1, 1986¹⁹

(Duden 9): Richtiges und gutes Deutsch. Wörterbuch der sprachlichen Zweifelsfälle.
Der Duden in 10 Bänden Bd. 9, 1985³

- 13) このグループの動詞については、Schulz / Griesbach が「不完全な語形の複合動詞」
として挙げている。しかし、「不定詞形と過去分詞形しかない」として 2 a のグル
ープに属する動詞も挙げており、定形の時以外は分離する動詞には触れていない。
vgl. S. 41

一方 Duden では、前述のようにこれらの動詞は疑似複合語とされている。

vgl. S. 413

- 14) Curme は、このような動詞について次のように述べている。

また、いくつかのこれらの複合語の結びつきの強さについては、非分離形と分
離形が生じるということで、揺れが広がっている。分離形はたいいの場合、
過去分詞と zu 不定詞に限られている。アクセントが第一構成要素に置かれる

ということが、同じようにアクセントが第一構成要素にある分離複合語の類推によって、ge, zu を間に挟むことを示唆するのである。(S. 329)

- 15) Fleischer S. 316
- 16) 最近の見解では、この語は複合名詞からの逆成[Rückbildung]とされている。すなわち notlanden < Notlandung である (Fleischer / Barz S. 293)。Erben によるとこれは、よく用いられる動詞 landen と結び付けられることで、複合名詞の接尾辞 -ung が削除されるという逆成 (Landung : Notlandung = landen : X (→ notlanden) である (S. 34)。
FLEISCHER, Wolfgang · BARZ Irmhild: Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1992
ERBEN, Johannes: Einführung in die deutsche Wortbildungslehre, Erich Schmidt Verlag, Berlin, 1983²
- 17) Fleischer a. a. O.
- 18) vgl. Duden 9
- 19) s. Schulz / Griesbach S. 41; Duden 9 S. 413
- 20) Paul Bd. 5 S. 42
- 21) vgl. Duden 9
- 22) s. Duden 9 ちなみに Fleischer も、この動詞では不定詞のみが用いられると述べている。S. 316
- 23) Schulz / Griesbach S. 41
- 24) Curme S. 329 (Hauptmann: Und Pippa tanzt)
- 25) vgl. Duden 9
- 26) vgl. Duden 9
- 27) Paul Bd. 5 S. 37; Helbig / Buscha S. 188; Schulz / Griesbach S. 39; Duden S. 424; Curme S. 441
- 28) このことについては、Curme が次のように述べている。
(…) 動詞との複合語での、(mißの) アクセントは不安定である。いくつかの動詞ではたいていアクセントはないが、他の動詞ではアクセントがあったりなかったりし、それゆえ分離・非分離の接頭辞と見なされる。しかしながらたいていは、アクセントがあっても、不定詞と分詞の場合の ge, zu によるものを除けば、書き言葉では動詞から分離しない。(S. 441)
- 29) miß を第一構成要素に持つ動詞の揺れについては以下を参照。
Duden 9 S. 471; Helbig / Buscha S. 189; Schulz / Griesbach S. 21
- 30) vgl. Schulz / Griesbach S. 21; Paul Bd. 5 S. 38; Curme S. 441
- 31) 非分離型と分離型の二種類の過去分詞を挙げているのは Schulz / Griesbach (S. 21)、分離型のみを挙げているのは Paul (Bd. 5 S. 38)、非分離型のみを挙げているのは Duden 9 (S. 471) である。

- 32) s. Duden 9
- 33) Paul a. a. O.
- 34) Curme S. 441
- 35) Paul a. a. O.
- 36) Schulz / Griesbach S. 41 しかし, wettgelaufen, wettgerannt という形態的分離を示す過去分詞が挙げられていることもある (vgl. Curme S. 329)。
- 37) 現在分詞では書き換えが行われず, zu 不定詞形では書き換えが行われる例が見られる (Curme a. a. O.)。
- die ehebrechende Frau 「姦通する女」
- Gott verbietet, die Ehe zu brechen. 「神は姦通することを禁じる」
- 38) Brinkmann S. 252
- BRINKMANN, Hennig: Die deutsche Sprache. pädagogischer Verlag Schwann, Düsseldorf, 1971²
- また, Helbig / Buscha は radfahren / Auto fahren について, 「分離成分と自立語の境目は明確ではな」く, 自立語である Auto は「相当する分離成分 (rad) と基本的に同じ性格を持つ」と述べている (S. 193)。
- 39) vgl. Helbig / Buscha a. a. O.
- 40) ただし, Duden 9 では次のような「新しい概念を生じさせる」場合のみ, 一語で書くこととされている (S. 140)。
- Sie haben [die Säbel] blankgezogen. 「彼らは (サーベルを) 抜いた」
- 41) 後述するように, 話し言葉では baden gehen には「失敗する」という意味がある。それを考慮に入れた場合には, この意味関係は必ずしも成り立たない。
- 42) vgl. Helbig / Buscha S. 193
- 43) Duden 9 によると, zufrieden による慣用句は「結びつきによって, 新しい概念が生じたり, 意味にニュアンスが与えられる場合, 一語書きされる (S. 782)」
- 44) ŠELUDKO, N: Zur Frage der Verbeinheiten des Typs “zugrunde gehen” In: Deutsch als Fremdsprache 1968
- Šeludko の論については後に詳しく述べる。
- 45) Duden 1 S. 64
- 46) Duden 9 ではこれらの語について, 「新たな概念を表さないにもかかわらず, 統一体 [Einheit] として感じられるから」一語書きされると述べられている。おそらくこの場合の統一体とは, 意味的統一体であろう。
- 47) vgl. Duden 9 S. 787
- 48) vgl. Hentschel / Weydt S. 82
- HENTSCHEL, Elke · WEYDT, Harald: Handbuch der deutschen Grammatik, de Gruyter, Berlin, 1990
- (邦訳: 西本美彦他訳「ハンドブック現代ドイツ文法の解説」同学社)

- 49) vgl. Helbig / Buscha S. 190; Schulz / Griesbach S. 40
- 50) vgl. Helbig / Buscha S. 191
- 51) Helbig / Buscha S. 190
- 53) AFONKIN, Juri: Adverbiale Partikeln als Mittel zur Differenzierung der Aktionsart
(2) In: Deutsch als Fremdsprache 1981
- 53) Afonkin S. 24
- 54) Šeludko S. 23
- 55) Šeludko a. a. O.
- 56) vgl. Šeludko S. 29
- 57) 少なくとも現在の時点では、ということは付け加えておくべきかもしれない。
- 58) Fleischer / Barz S. 297ff.
- 59) しかしながら、今まで述べてきたような様々な揺れを、ひとえに正書法の基準の混乱のせいと決めつけるのは早計だろう。確かに、正書法を改訂することによって、現在の混乱は解消するかもしれない。しかし、先にも述べたように、正書法とは用法を規定するものでありながら、自らの方も言語の使用者の用法に影響を受けるものである。すなわち、新しく定めた正書法も、いずれずれが出てくるということは十分考えられる。また再び、揺れが生じるのである。
- 60) 「周辺」という語の概念については、以下を参照。
DANEŠ, František: The Relation of Centre and Periphery as a Language Universal.
In: Travaux linguistiques de Prague 2, Praha, 1966